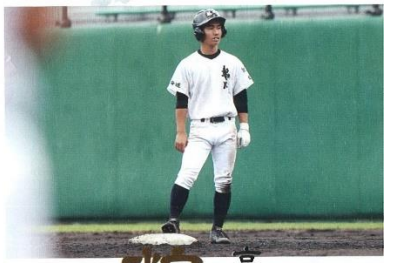
北の球児たち 2020 総集編

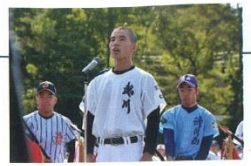
鵡川

高校野球の心と目的と 鵡川 Mukawa

一瞬の夏、永遠の心



鬼海将一監督　1984年生まれ
鵡川高・筑波大。指導者歴は尽誠学園（香川）、大阪偕星学園など。2017年7月より鵡川高監督



阿部柊希前主将
千鹿リハビリテーション大学進学予定
2019年10月6日　秋季北海道大会選手宣誓

うっかりしていた。ずいぶん長いこと監督を務められているものと勝手に思い込んでいた。鵡川高監督・鬼海将一さん。指を折り実質3年ちょっとかと慌てた。それだけあまりにも大きな出来事もあったし、苦労もあったのだと。

甲子園で躍動した姿と「鬼海（きかい）」という響き。そうだ、私たちはもう20年近く、あなたを勝手に知っていたのだ。「鵡川」という少し小さめな黒文字とともに。

鬼海将一の心

「試合に勝って、優勝して初めてのことを胸張って話したかったんです。でも、この子たちの卒業とともに私も新たな一歩を踏み出すと決めたので、私が鵡川高でやろうとした高校野球を話せてよかったです」

鬼海将一監督、36歳。鵡川高で故佐藤茂富監督の薫陶を受け指導者を志し、縁あって母校へ帰ってきた。

2017年（平成29年）の秋から指揮を執る予定も寮生活の不祥事が発覚し出場辞退。16年秋、17年春と北海道大会で活躍したことで、集まりかけた数多くの有望な中学3年生が進路を変更する中、鵡川高を選択した卒業する3年生10人。例年よりも人数は少ないかもしれないが思いは強い。鬼海監督はその心にかけた。

その1人、阿部柊希前主将。兄は5年前の夏、創部3年目で一気に甲子園へ駆け上がり話題を集めたクラーク記念国際高のキャプテンだった。

「兄を見て寮生活を経験したいと思い、兄と違う学校で甲子園に行きたいと鵡川高に決めました。不祥事は気にしませんでした。ここでやる、と決めていたので」

厳しいことは覚悟していても実際に直面する厳しさは想像を上回った。

「それでも、今、ここで寮生活を経験できて、本当に良かったです」

阿部君は堂々と厳しい時間を見つめ直し、胸を張る。

18年9月6日、北海道胆振東部地震。「寝ている時にドーン！です。何が起きたのかわかりませんでした。自分、2段ベッドの上だったので、下を見ると物が散乱してました。死というもの、初めて考えた気がします。その後はもう…何ともいえない状態でした」

この経験を強さに変えられる野球部にしたい

むかわ町職員の立場として鬼海監督はまさに野球どころではない胸中だった。それでも町民の温かな声が集まってくる。「大会に出てほしい」。むかわ町にある鵡川高が辞退したことも町職員として複雑な心境になった。

こうして阿部君をはじめ、鵡川高の3年生は1年生の秋にも一度、野球から引き離されそうになった。辛うじて野球とつながれたのは町の人たちのおかげ。大会を終えて風の強さと寒さが厳しさを増す中、鵡川高野球部の活動はボランティア活動が中心になった。

「ひと言では表現できませんが、自分から行動することを学び、実践できた貴重な時間でした。ボランティア活動の中で一番難しくて大変だったのは、自分から行動することでした」

相手を思うことから行動につながるということを当時15歳の部員は学び「町の人のために、この経験を強みにできる野球部にしたい」と考えた。

この経験を財産に変える力をすでに身につけていた。

地震から1年が過ぎキャプテンとして秋の札幌円山球場に帰ってきた阿部君は北海道大会の開会式で選手宣誓の大役を務めた。北海道大会の選手宣誓はすべての組み合わせが決まり、改めて各校のキャプテンがトーナメントの順番にクジを引く。19年秋の鵡川高は20番目、最後だった。阿部君は形式的に残り1つのクジを引き、そのクジが選手宣誓だった。

指導者・鬼海将一が鵡川でやりたかった野球

実質的には阿部君ら3年生の入学と同時に鵡川高監督デビューを果たした鬼海監督だが、秘めていた思いがあった。冒頭の鬼海監督が目指した高校野球。

19年秋、室蘭支部で駒大苫小牧高を破った試合の話の中で初めて聞いた。

「今までやってきたことを生徒たちが発揮しようとしました。生徒たちの力しか出ていません。オレ、本当に何もやっていないもんな？」

と阿部君へ。すると阿部君が「はい」と普通に返事をした。

選手に同じ問いかけをする指導者は多く、選手たちの大半は「いや、そんなことはないですよ」と笑う。ところが阿部君はクールに「はい」と答えた。

ふと阿部君が話してくれた。

「自分たちでサインを出しているんですよ」

ノーサイン野球ではない。サインで選手たちは動く。そのサインを選手たちが考えて、伝えていた。それを可能にするのは唯一、練習だ。

「彼ら練習が本当にキツかったと思います」（鬼海監督）

実戦練習のほとんどはその意思疎通に時間を費やした。意思疎通だけではない。そのプレーを選択する根拠を突き詰める時間だった。

「そのプレーの根拠は何？やっても いいけれど根拠は？」

「田舎町の小さな学校で厳しい寮生活をしている利点です。自分から動くというのは野球でも大切なこと。ですから僕もそうですが、鵡川高は町に育てられているんですよ」（鬼海監督）

高校野球のあるべき姿を追い続けて

昨年の夏も「自分たちがやれることをやろう」と臨んだ。室蘭支部を勝ち上がり南北海道大会へ。立命館慶祥高戦では7対12で迎えた最終回に3番石塚康平君から鮮やかな三連打で2点を返す猛反撃を見せ9対12で試合を終えた。攻撃前の円陣はなく、伝令は背番号15の佐藤翼君が「行きます」とベンチを飛び出した。

「道大会では勝てませんでしたが生徒たちが指導者を超えていきましたよ。勝てなかったのは相手が上だっただけ」（鬼海監督）

鬼海監督は今年度いっぱいで退職し同時に鵡川高野球部監督を離れる。練習で思い切り苦しみ、悩み、叱られ、公式戦では精一杯「野球」に取り組んできた生徒たちの「自分から行動する力」を見届けて。

最後に鬼海監督。

「南北海道大会もうれしかったですが、室蘭支部で浦河と対戦したことです。本当に気持ちのいいチームでした。僕らは勝ったので、そのまま帰ろうとしたらキャプテンの山田君が来てくれて『ありがとうございました。対戦できてよかったです！』って。もう感動しました…。生徒たちもみんなバスから降りて写真撮ったりして。だから浦河や副子府のためにも、という気持ちになったと思います。最後も簡単に終わってたまるか、と戦ってくれたと思います」

不祥事もあった、被災者にもなった。愛する町の倒壊も、復興も見た。そして生徒たちは育った。

ふるさとから離れても、帰る場所がある

甲子園大会の中止が決まった後、鬼海監督は親交があった学校へ「引退試合」を呼びかけた。その時に頭をよぎったのが副子府高・木村仁監督とのやりとりだった。19年11月、副子府高の3人と連合チームを組む女満別高・津別高とやってきて選手たちと交流した。そして昨夏。

「彼ら（副子府高野球部の）3人の花道を作ってあげたい」と木村監督から連絡が来た。鬼海監督は感激のあまり手が震えたそうだ。

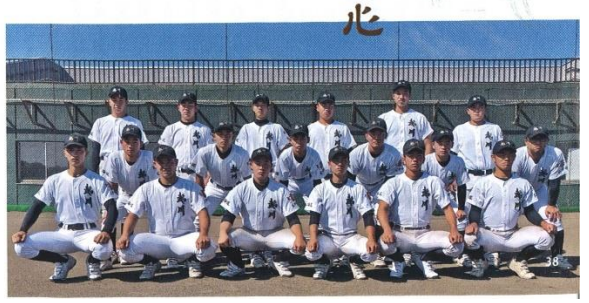
独自大会を終えた8月下旬。副子府高の3人と1年生マネジャーがやってきた。雨のため「交流記念試合」はできなかったが前日は生徒、保護者、指導者との交流、翌日は室内練習場で合同練習。副子府高は鵡川高に失礼がないように、そして堂々と引退できるように独自大会後もこの日のために練習を重ねたそうだ。

浦河高には出向いた。「吹奏楽の引退試合も兼ねました。野球部は本当に多くの方から応援されているので、せめて吹奏楽もと思いました。もちろんうち（鵡川高）も。公式戦以上だったんじゃないかな（笑）。

「最高の雰囲気で感動しました。応援の熱を感じました」（阿部君）

地震による被害で避難所、仮設寮を経て昨年末に新しい寮が完成した。阿部君は引っ越し後、2週間程度しか住めなかった。本誌発行時には新たな一歩を踏み出す準備を進めているだろう。

「厳しい寮生活から解放される、と思ったら不思議と寂しいですね。しかもこんなに快適になって（笑）。帰ってくる楽しみが増えました」



入居したばかりの真新しい寮で
鬼海監督（左）、阿部君